ハイマート
Heimat

ぐんま日独協会 会報

2020 年 1 月 18 日

５５号

発行者　　鈴木 克彬
発行所　　ぐんま日独協会
〒371-0105
群馬県前橋市富士見町石井 2445-219
電話　：027-288-4297
E-mail：info@jdg-gunma.jp

ホームページ　：　http://www.jdg-gunma.jp/

ホームページの右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。

【クリスマス会でのコンサートで演奏する
Marienkäfer（立川統子さん・田中志穂子さん）　＋ 打楽器の瓜生郷子さん】

１．会長のことば　……　２
２．日独ユースネットワーク　……　３～４
３．日独漫画コンクール特別賞　……　４～１３
４．ドイツ炭鉱派遣の思い出（連載－６）　……　１３～１４
５．日本百名山 - 独訳（連載－５）　……　１５～２０
６．デザイナー修行奮闘記（連載－１４）　……　２１～２２
７．2019 年度クリスマス会　……　２３
８．法人会員および新入会員紹介　……　２４

群馬県環境対策、２０５０年を見据え、５つのゼロ宣言
環境先進国ドイツから学ぶこと

会長　鈴木克彬

２０１９年（令和元年）１２月２５日付の上毛新聞の記事によると、群馬県の山本一太知事は環境省の小泉進次郎大臣に、２０５０年を見据え『群馬県は５つのゼロ宣言を目指す』と表明しました。　その５つとは次のとおりです。

１　自然災害による死者『ゼロ』
２　温室効果ガス排出量『ゼロ』
３　災害時の停電『ゼロ』
４　プラスチックごみ『ゼロ』
５　食品ロス『ゼロ』

この５つを見ると『ゼロ』は厳しいな？と思いますが、３０年先の目標です。最近の異常気象対応・地球環境維持のため国・県・市町村・地域・個人すべてが総力を挙げて対応しなくてはいけない問題だと思います。しかし改めて振り返ってみると、この宣言の内容は、３０年ほど前からドイツは各種のルールを国及び地方の州がつくり、一体となって既に実行していることではないでしょうか。

例えばドイツでは、自然保護のため樹木１本伐採するにも許可が必要です。デポジット制度の実施で町からペットボトルの散乱がなくなり、包装容器の規制令でプラスチックごみが激減し、殆どの野菜・果物類がばら売りとなりました。

私は群馬県の環境アドバイザーをしておりましたので、ドイツで実施されているデポジット制（預り金制度）やレジ袋の有料化等を群馬県でも実現したかったのですが、業界の意向・結束が強く実現には至りませんでした。・・・各種情報によると、２０２０年７月１日から、レジ袋は全国一斉に有料になるようです・・・

私は、地球温暖化対策・プラスチックごみ対策等はどうしても国が率先し、産業界を説得し、自治体の協力を得て“点を線でなく面にして徹底・ＰＲしなくては難しい”、と考えます。

日本は山林が多く、また地震や台風等自然災害も多いという、ドイツとは異なる条件下はあると思いますが、環境先進国ドイツの実施した内容等を再学習し、群馬県の目指す地球温暖化防止やプラスチックごみ減少等の環境対策に出来る限り応援・協力しでいきたいと思っています。

２．JG Youth Connect in Gunma 開催（会員　日向泰史記）

２０～３０代を中心とした若手の日独交流団体”日独ユースネットワーク”の全国交流イベント「JG Youth Connect」が、今年は群馬県で 9/28～9/29 の２日間開催されました。関東からはもとより、北海道、新潟、大阪、京都、香川、福岡など全国から２７名とドイツ人２名も参加し、当協会からは４名(一場会員、針谷会員、菅原会員、日向)がホストして参加者を迎えました。

１日目は高崎駅に集合し、高山村にある“みどりの村のキャンプ場”に車で向かいます。キャンプ場に到着しチェックイン後、まず日独ユースネットワークの高橋代表から開会宣言とイベント開催の説明があり、続いてぐんま日独協会鈴木会長からご挨拶と本イベント参加者への激励の言葉をいただきました。

今回のイベントではワークショップも実施しました。「幸せについて」という少し哲学的でドイツらしいテーマについて参加者全員で勉強。団体若手リーダーによるパネルディスカッションで議論を深めました。ワークショップ後に２日間を楽しく幸せに過ごすためのアイデア提案をプレゼンし、みんなで”JG-YOUTH”の人文字を作り、イベントの最大目的である「Connect=つながり」を表現することに決定。翌朝、朝露滴る芝生の上に全員の思いを表しました。

近くの温泉で汗を流した後は“German Summer Night“と題して料理で日独交流です。

４つのチームに分かれて、ドイツ鍋・日本鍋・ドイツ風日本プレート・日本風ドイツプレートをクッキング。クリームチーズやソーセージを使ったドイツ鍋や、群馬県の具材をふんだんに使った日本鍋など、工夫を凝らした料理に舌鼓を打ちました。

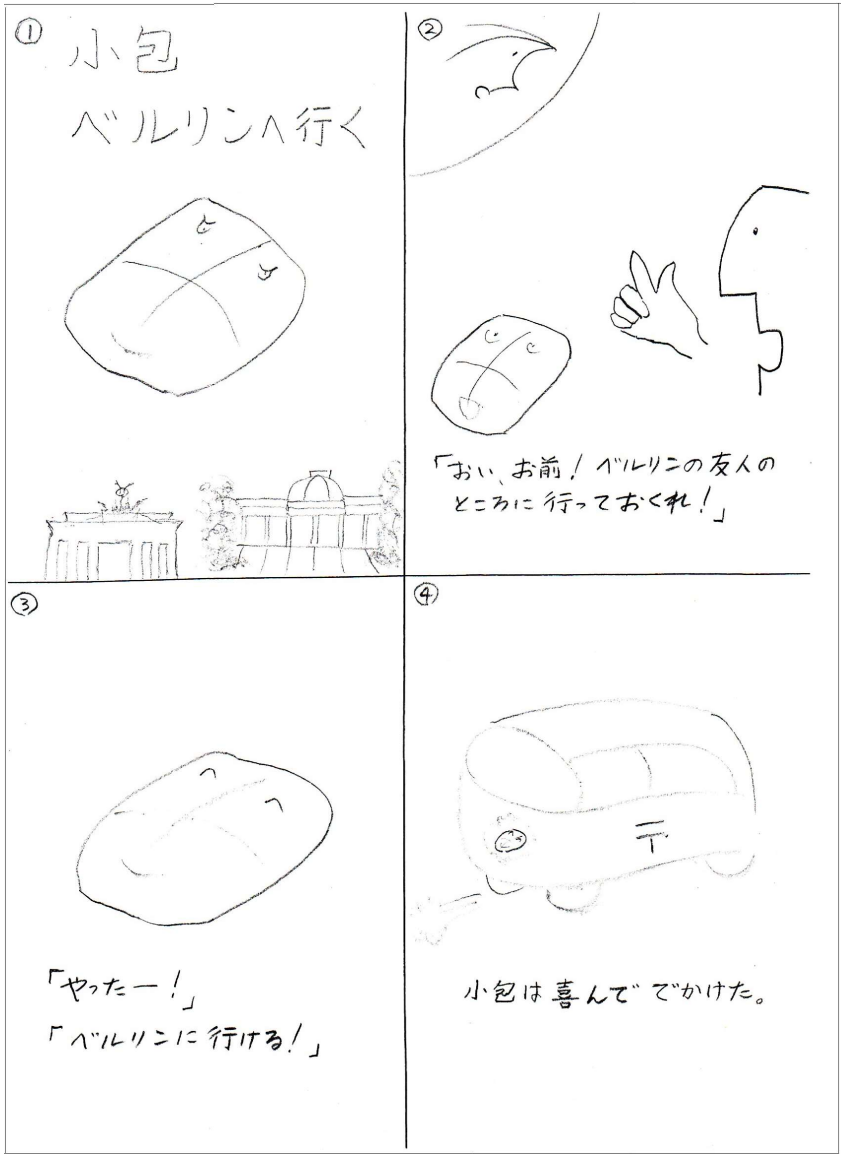
２日目は伊香保温泉まで足を伸ばします。群馬大学名誉教授で当協会会員の白倉先生に“伊香保とベルツ”、“温泉療法”について解説をいただきながら、石段下から飲泉所を経てベルツ像前まで約１時間の道のりを散策しました。普段なかなか聞くことがない温泉療法について参加者たちも熱心に聞いていました。そして、勉強の後は温泉を堪能し、水沢うどんも味わいながら伊香保温泉を満喫して、高崎駅前に戻って無事イベントを終了しました。

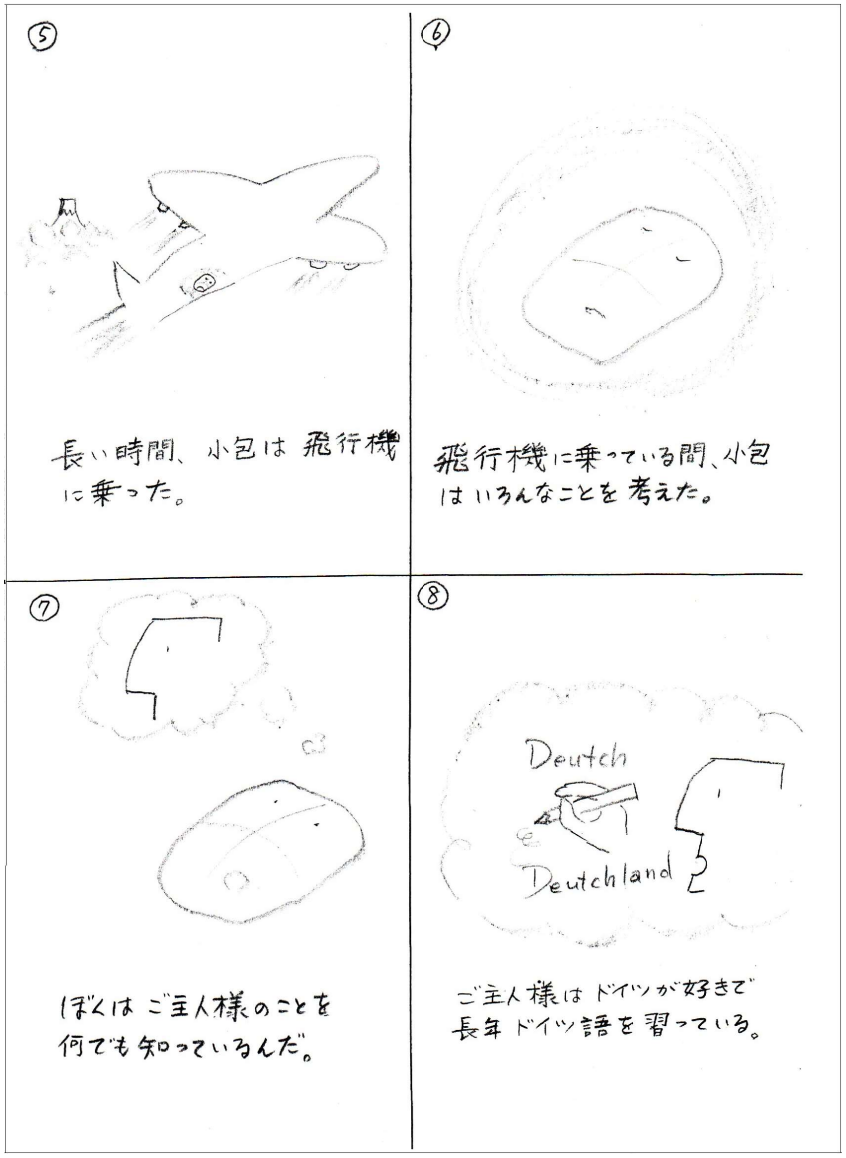
今回のイベントを通して参加者に群馬県の素晴らしさを体感してもらい、特に自然の豊かさを感じてもらえたことは、ホストとして大変嬉しかったです。また、年に一度ですが全国の仲間と日独交流について話をすることが出来、とても有意義な時間となりました。

最後にイベント開催にあたって多大なご支援をいただきました鈴木会長、近藤事務局長、白倉先生には厚く御礼を申し上げます。

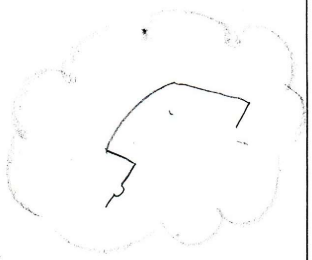
３．日独漫画コンクール特別賞作品（事務局）

（公財）日独協会がドイツ連邦共和国大使館の後援のもと、ベルリン独日協会との共催で開催した「日独漫画コンクール」においてぐんま日独協会会員のペンネーム「ベア」さんの作品が特別賞に輝きました。（公財）日独協会の許可のもと、その作品を掲載いたします。


①
小包
ベルリンへ行く
②
「おい、お前！ベルリンの友人のところに行っておくれ！」
③
「やったー！」
「ベルリンに行ける！」
④
小包は喜んででかけた。


⑤
長い時間、小包は飛行機に乗った。
⑥
飛行機に乗っている間、小包はいろんなことを考えた。
⑦
ぼくはご主人様のことを何でも知っているんだ。
⑧
Deutch
Deutchland
ご主人様はドイツが好きで長年ドイツ語を習っている。

⑨

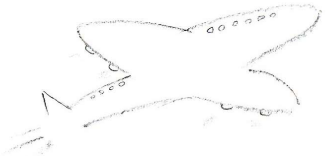


ご主人様は いつかドイツへ
行きたいと考えていた。

⑩

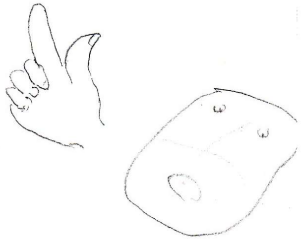
1989年11月9日 びっくりする出来事
があった。ベルリンの壁がこわれた
のだ。

⑪



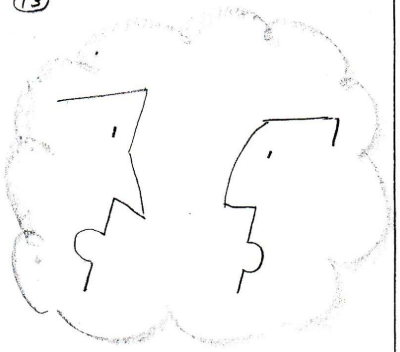
ベルリンの壁がこわれた1年後の
1990年に、ご主人様はドイツ
旅行を決心する。

⑫



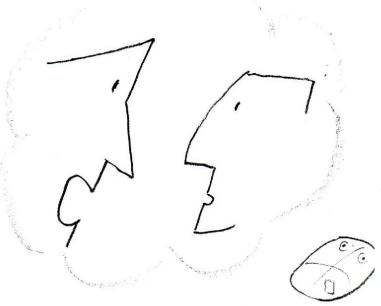
ご主人様が ドイツ旅行を
決心した理由は こんなこと
からだった。

⑬



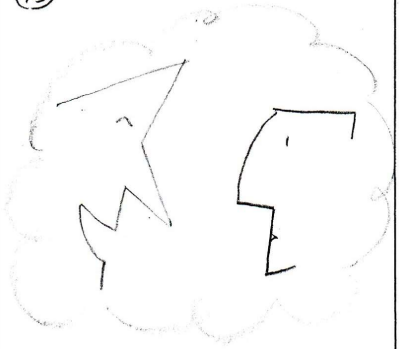
ご主人様は当時中学校の
先生で、職場にイギリス人の
ALTがおり、ドイツの話題で
親しくなっていた。

⑭



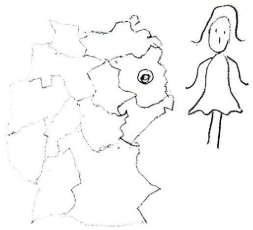
ある日ALTがご主人様に言った。
君はドイツが好きなんだろう？
ベルリンに行きたいんだよね。

⑮



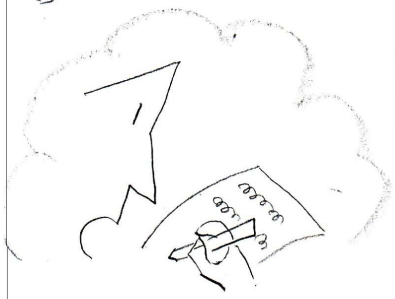
だったら、今年君はベルリンに
行けるよ。

⑯



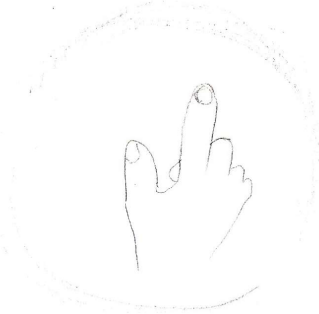
なぜなら、ベルリンにはぼくの
友だちがいるから。彼女が
いるからドイツ旅行は心配
ないよ。

⑰



君がベルリンに行く気があるなら
ぼくの友だちに手紙を書いてあげるよ。

⑱

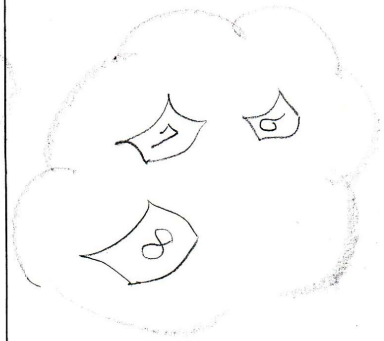


2週間時間をあげるから
考えてみてね。

⑲

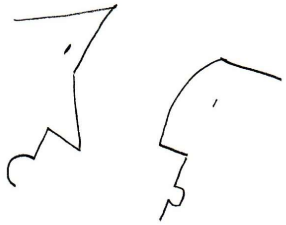
ララ・・・どうしよう？
ベルリンには行きたいが、
ドイツ語は自信がない
・・・。

⑳



2週間が過ぎ、決断をする
日となった。

㉑

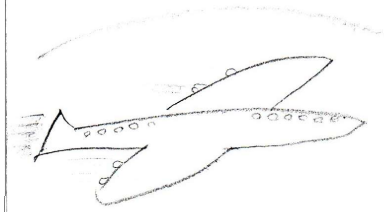


「どうする？ さあ、決断
するのだ。」
ご主人様は
「行く。」と答えた。

㉒

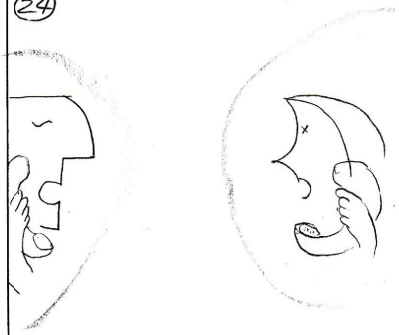
「これはぼくからの手紙、ベルリン
に行ったら渡しておくれ。」

㉓

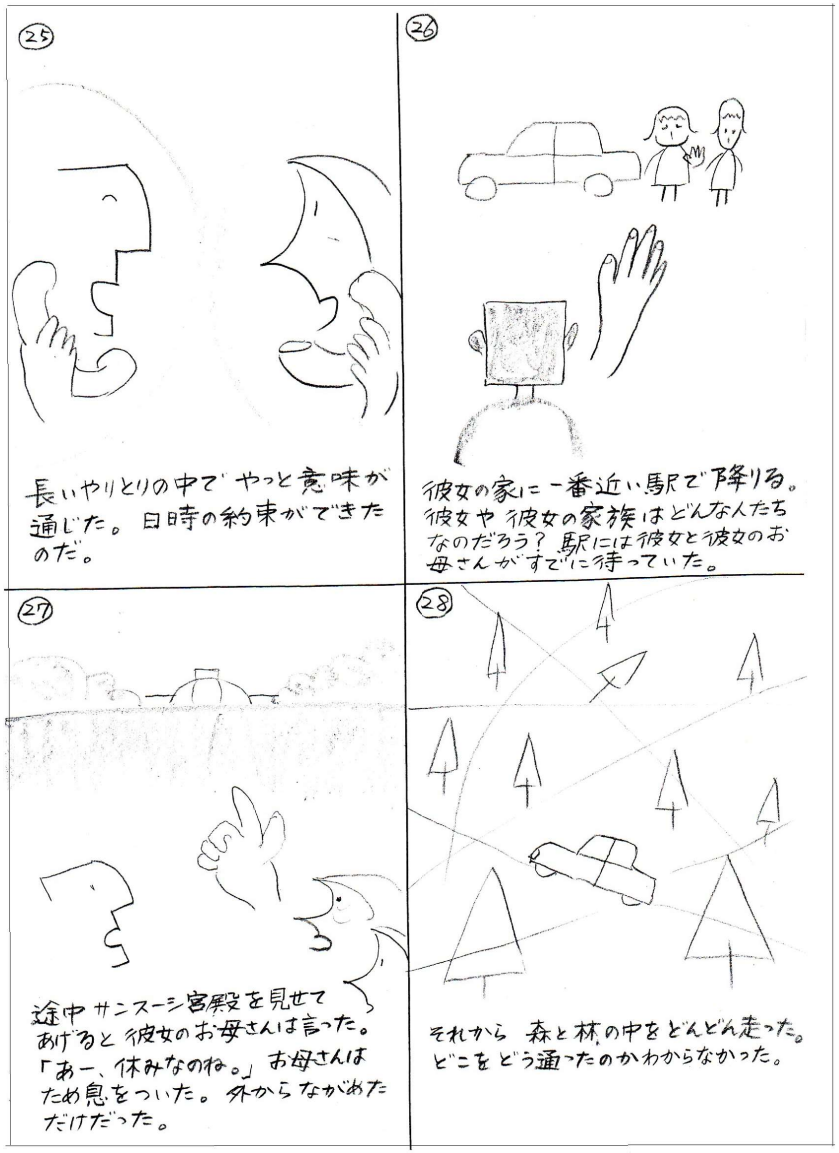


1990年12月出発。
そして、ベルリンに着く。
到着したら、訪問先に電話を
することになっている。

㉔



初めてのドイツ人への電話は
緊張した。
「ああ、やっぱり通じない。相手の
言うことがわからない。」

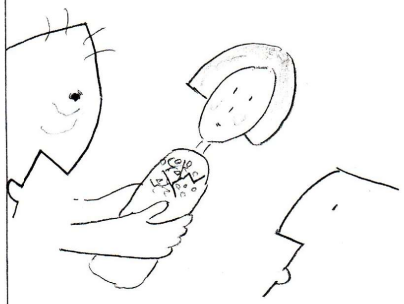

25
長いやりとりの中でやっと意味が通じた。日時の約束ができたのだ。
26
彼女の家に一番近い駅で降りる。彼女や彼女の家族はどんな人たちなのだろう？駅には彼女と彼女のお母さんがすでに待っていた。
27
途中サンスーシ宮殿を見せてあげると彼女のお母さんは言った。「あー、休みなのね。」お母さんはため息をついた。外からながめただけだった。
28
それから森と林の中をどんどん走った。どこをどう通ったのかわからなかった。

29
どのくらいの時間走っただろうか？長かったのか、短かかったのか？彼女のお母さんはきびきびとハンドルを切ったが、乱暴な運転だった。車はBMWだった。
30
湖のほとりに彼女の家があった。自然に囲まれた静かなすばらしいところだった。
31
家に着くと彼女のお父さんが出迎えてくれた。
32
それから、私のコートを彼女のお父さんが掛けてくれた。彼は「重い。」と言ってにが笑いをした。

33

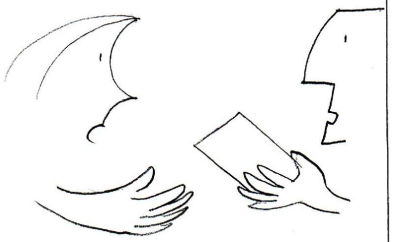
あいさつの後、おみやげを渡す。おみやげはこけしである。たどたどしいドイツ語でこけしの説明をする。

34



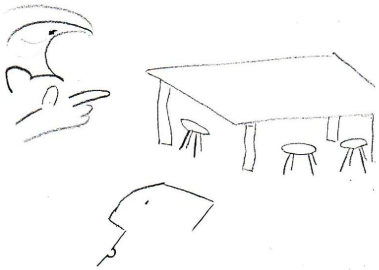
彼女のお父さんはこけしを見て何か言っている。よくわからなかったが、芸者とかん違いしているようだった。

35



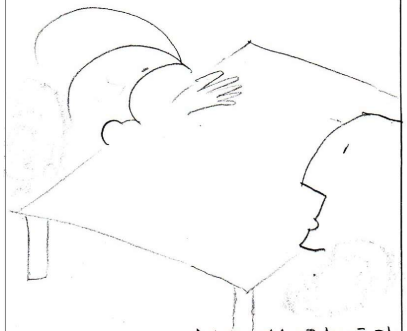
それから、彼女に彼からの手紙を渡す。彼女はそれを受け取ると「ちょっと待っていて。」と言って自分の部屋に行った。

36



その場所に残ったのは彼女のお母さん。彼女はテーブルの角を指す。私は「Ecke」と言った。
彼女は「Tisch でしょ。Ecke はここ、Tisch はこれ！」と言った。

37

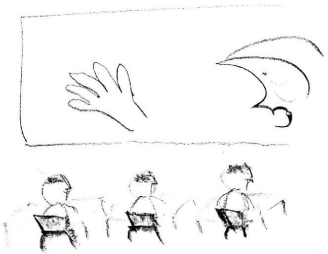


テーブルのところで話をしましょうということだったのだ。

38

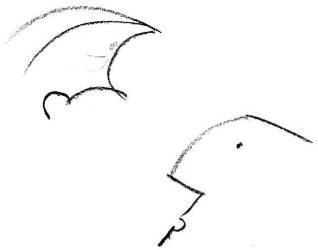
「ああ、何だか調子狂っちゃったなあ… そんなことわかっているんだけどな… Ecke と言ったのがまずかったのか。」

39



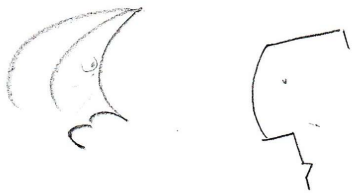
彼女は学校の先生で絵を教えている。

40



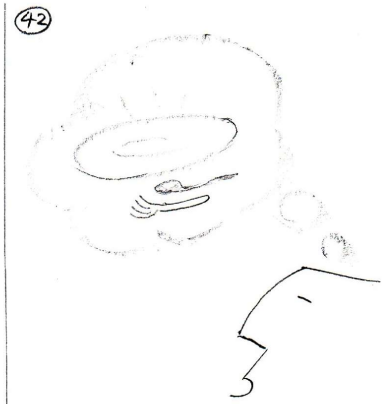
彼女は私に質問した。私の仕事のことや働いている時間や長期の休みについてである。

41



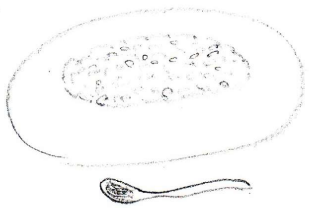
彼女はうなずいて「大変ね。」と言った。日本は大変なのかな---。

42



しばらくして、昼食。「ドイツ人の家庭では一体何を食べるのだろう？」

43

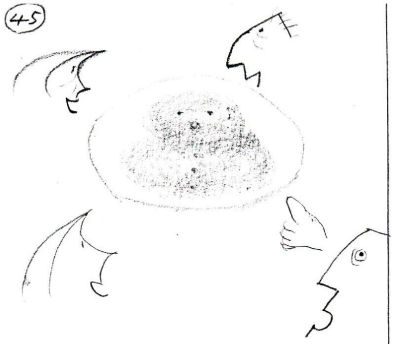


「なんと米のチャーハンだ。まさかドイツ人の家庭で米の食事が出るとは！」

44

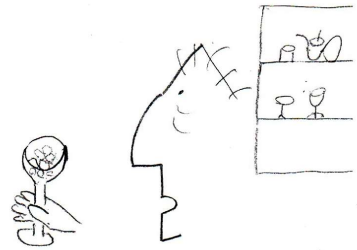
その後、デザート。お皿にうすく広がった黒い丸二つ。チョコレートのようだ。
「何だ、これは？」

45



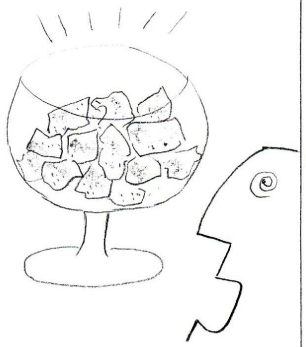
「雪ダルマ」と私が言うと一家に笑いが起こり、クリスマスの話題に移った。

46



彼女のお父さんは棚から何かワイングラスのようなものを持ってきた。「ワインでも飲ませてくれるのか？いや、違う。」

47

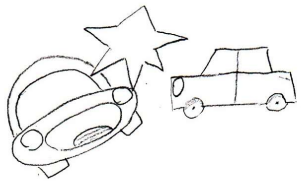


ワイングラスの中に石のかけらが入っていた。赤や黄や青の色がついていて、何ときれいなことか。石のかけらはベルリンの壁のかけらだった。

48

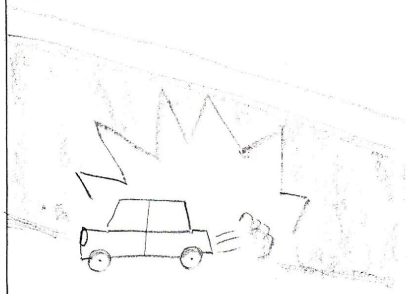
そして、ベルリンの壁のことが話題になった。「今交通事故が多いの。」と彼女のお母さんは話す。

49



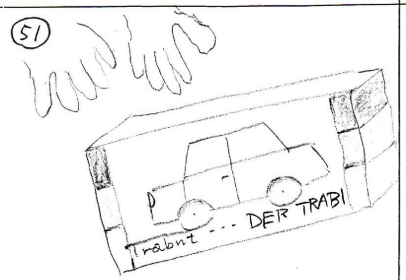
東側の人たちの車が西側に入り、毎日大きな事故を起こしており、私たちはとても迷惑しているというのである。

50



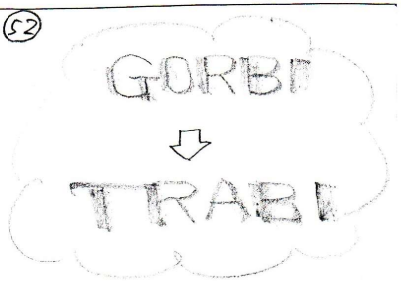
東側の人たちは西側の道路事情がよくわからないようで、そのために事故はたくさん起こるようである。

51



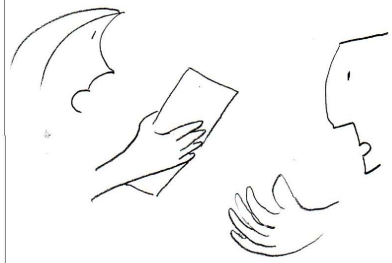
そろそろ帰る時間になった時彼女からおみやげをもらう。トラバントの模型である。

52



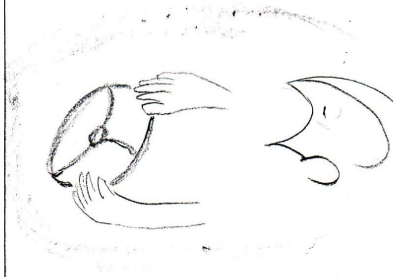
トラバントはトラビーと呼ばれている。「ゴルビーをもじってつけられたのよ。」と彼女のお母さんは笑いながら話してくれた。

53



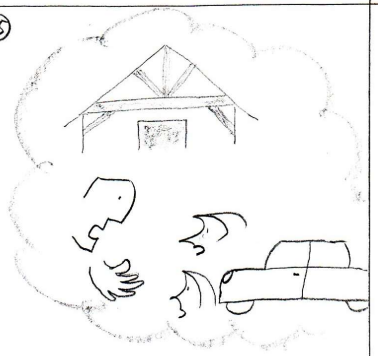
彼女は手紙を持ってきて「彼に渡して。」と言った。あんなに短い時間なのに返事の手紙を書いていたのだ。

54



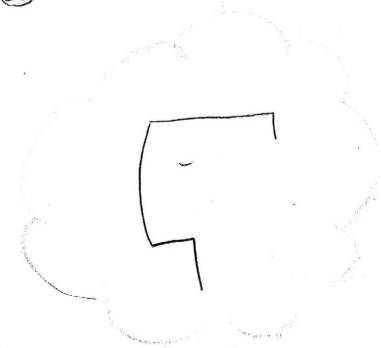
彼女のお母さんの運転で、待ち合せをしたあの駅に向かった。あの乱暴な運転で。

55

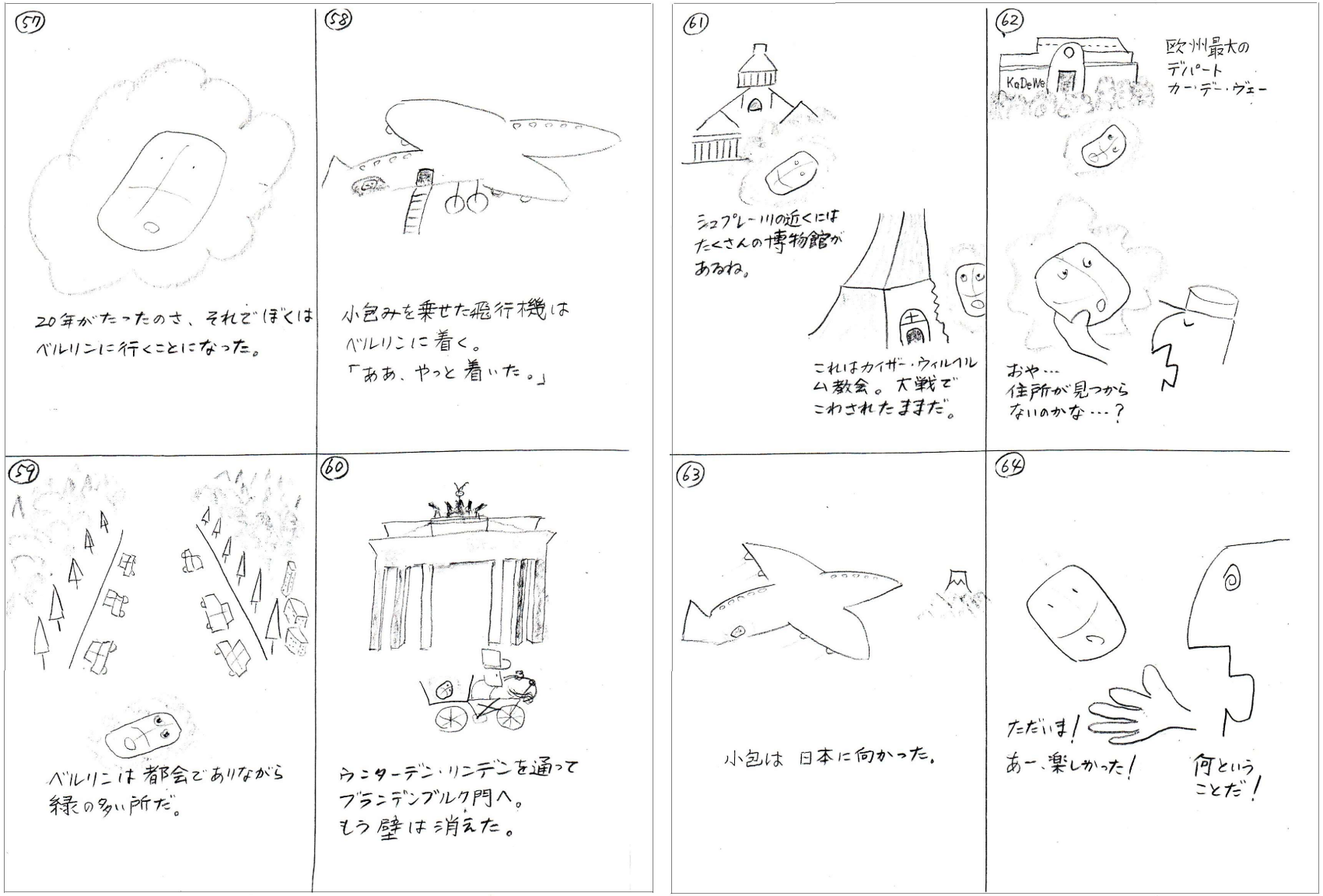


駅に着いた。二人にお礼を言って別れた。

56



あれから何年たったろう？


57
20年がたったのさ、それでぼくは
ベルリンに行くことになった。
58
小包みを乗せた飛行機は
ベルリンに着く。
「ああ、やっと着いた。」
59
ベルリンは都会でありながら
緑の多い所だ。
60
ウンターデン・リンデンを通って
ブランデンブルク門へ。
もう壁は消えた。
61
シュプレー川の近くには
たくさんの博物館が
あるね。
これはカイザー・ウィルヘル
ム教会。大戦で
こわされたままだ。
62
KaDeWe
欧州最大の
デパート
カー・デー・ヴェー
おや…
住所が見つから
ないのかな…？
63
小包は 日本に向かった。
64
ただいま！
あー、楽しかった！
何という
ことだ！

★作者コメント

作者は 1990 年に勇気を出してベルリン旅行に行った。ベルリン旅行のきっかけや初めてのドイツ人家族とのふれ合いを描きたかった。20 年後に小包を送ることになったが、戻ってきてしまった。そこで、小包を主人公にして物語をつくろうと思った。

【2020 年 1 月 16 日の授賞式にて】

４．ドイツ炭鉱派遣の思い出 - その６　（会員　對馬　良一　記）

日独二人の親友との永遠の別れ – その２

マリアンネ　メンヒ（Marianne Mönch）さん

「對馬さん何故メンヒさんを泣かせているのか？」と問い詰められた。ベルリン独日協会長のゲーガー氏でした。ボン独日協会のマリアンネ・メンヒ会長とはすでに、1 時間以上論争をしていました。45 年以上むかし三年間ドイツで働きながらドイツの炭鉱技術を学んだ時、ドイツ人やイタリア人とドイツ語で論争した経緯はたあったが女性相手と片言のドイツ語で勝手が違う。

2005 年 3 月 22 日の宇都宮のホテル東日本のロビーでのことだった。2005 年 4 月から 2006 年 3 月まで、日本におけるドイツ年の先触れとして、若者の交流拡大策などを論じる第一回パートナ会議の後、日本の各地を親善旅行する独日協会 90 名の責任者のメンヒ会長でした。宇都宮から群馬の伊香保温泉、その後東京、大阪、横浜、奈良、京都など各地を回り、関西空港から帰国する大旅行団でした。喧嘩？の理由は次の予定地の群馬のホテルの変更の事でした。伊香保温泉では、ホテル金太夫とホテル福一に分けての宿泊予定になっていました。このことは数か月前から了解済みの事でした。宿泊の前日になりホテルを一か所にするようにとの要請でした。前日の変更は絶対に不可能だ、1 名か 2 名位なら可能かもしれないが、90 名の大人数は出来ない、いや変更だの論争でした。私は絶対にできません。私が責任者ですから 100％無理だ、と突っぱねた。メンヒ会長はついに泣き出したのです。ゲーガー会長は各ホテルで夕食後どちらかのホテルに集まるのはどうか？と妥協案を出してくれた。それにはメンヒ会長も賛成で、私もその案なら、ぐんま日独協会も各ホテルも説得できると判断し賛成した。メンヒ会長は、ぐんま日独協会が旅行団受け入れの際にお世話してくれた人達に感謝の記念品を旅行団全員の前で贈呈したいので無理なお願いをしたのだと言った。私は嬉しかった。彼女のそのセレモニーのために無理を承知で言ったのだと解り気持ちが和らいだ。彼女は私の手を握り何度もダンケシェンを連発した。これがマリアンネ・メンヒさんとの出会いでした。翌日、宇都宮を後にして舘林に立ち寄りよさこいソーランの踊りを見、市庁舎で中島舘林市長から「鯉のぼり」を頂き大喜びでした。伊香保に行く途中高崎の少林山などを見学し伊香保で金太夫と福一で夕食後福一に集合し二次会の形式でセレモ バスに乗り込むとメンヒさんがまた私の手を握り「貴方のおかげですべて上手くいきました、ダンケシェン」の連発でした。そしてバスの皆に、この人が今回

の旅行の、日本側メンバーのツシマさんです、と紹介してくれた。成田から栃木、茨城、東京まで 90 人の旅行団に、私一人の案内人で食事をする暇がないほどでした。その夜の夕食の席上で皆さん大勢いる前で對馬さんとこれからブルダーシャフトをするといい、お互いに腕を絡めてビールを飲むと、これから「貴方」Sie ではなく「おまえ」Du の親称名詞に変わる。この日からお互いに Du で呼び合い始めた。メンヒさんは以前、日本のドイツ大使館にご主人の Dieter Mönch さんが勤務したことがあり、大の親日家でした。家は田園調布の長嶋茂雄の家の近所で長男の Ingo が長嶋茂雄さんの息子の一茂さんとよく遊んだらしい。メンヒさんの子供には日本の名前も付けている。長男には Ingo Akira Mönch、長女には Heike Haruko Mönch の名前も付けるほどの親日家でした。その後、彼女とはたくさんの行事を企画し実行した。日本側は橋本孝とちぎ日独協会会長と私、ドイツ側は Marianne Mönch と Gesa Neuert さん、この 4 人で日本訪問旅行、ドイツ訪問旅行など何度も企画実行した。

2016 年秋、ご主人が大腸がんのため亡くなり、彼女もすごく落ち込んでいましたが、息子さん夫婦の住むシンガポールで休養したり、ボンの家の近所に住む孫の Julius と楽しく遊ぶ写真を送ってきました。私がドイツ訪問の時は必ず彼女の家に泊まりお酒の好きなご主人と遅くまで飲みました。Marianne が体調を崩したとの報告は Gesa Neuert さんから知らされた。しかし電話で話をした時は元気で、「對馬さん、私の事より自分のことを心配しなさい」と何度も言われた。新年あけの 20 日頃、橋本先生から電話を受けた。Marianne の様態が思わしくなく、手術しなければ 3 週間、手術すれば逆に 1 週間くらいの寿命と聞かされた。毎日仏壇に祈っていました。3 月に入った 2 日に親友の高口さんの死亡の通知が入り、東京小平市で葬式や告別式などを終えほっとひと段落ついた時、Marianne の危篤の電話が入った。3 月 10 日、メンヒさんの携帯に思い切って電話した。「Ich bin Tsushima」。すると、娘さんが「對馬さんから電話よ」と知らせると電話が、ガタガタと雑音が入った。慌てて携帯を受け取ったようですがはっきりした声で「對馬さんありがとう、貴方をと友達になれて私は幸せでした、對馬さんは最高の友達でした。私達は最高の兄妹でした、もう私は貴方に会えません、對馬さんありがとう　あいがとう・・・さようなら・・さようなら　Auf Wiedersehen」で電話が切れた。私は涙で目の前が真っ暗になり放心状態でした。日本時間で 3 月 12 日 9 時 45 分死亡の連絡が入った。13 日に Gesa さんからメールが入った。Marianne さんの亡くなる直前の様子が書いてあった。「對馬さんからの電話を待っていたようで、私の最良の友、對馬さんと友達になれて私は幸せでした。Große Bruder ありがとう」と言ってしばらくして昏睡状態となり穏やかな顔をして天国に旅発ちました。とメールに書いてあった。宇都宮で喧嘩？をしたのが縁で生涯の友となった。彼女は 2005 年 4 月 29 日、日本政府から旭日章受章も授与されている。2018 年 3 月 17 日に Bonn の教会でお別れ会が大勢の友人の参加で執り行われた。我が人生最良の異国の友 Marianne Mönch さん貴方の事は決して忘れません。安らかにお眠りください。アーメン　・　合掌

お二人のご冥福をお祈りします。　（完）

５．日本百名山（連載-５）　（会員　深田勝弥　記）

５．大雪山　（二二九〇米）

5 Daisetsu-san (2290 m)

5-01

大雪山という名はいつ頃からついたかははっきり知らないが、もとはヌタクカムウシュペと言った。『山岳』第２年（明治４０年）に北海道人と名乗る人が、この北海道第一の高山にまだ和名が無いから「しろぎぬやま」としたらどうだろう、と提案しているところを見ると、その頃はまだ大雪山の名はなかったらしい。多分この名が一般に流布しだしたのは大正に入ってからだろう。

Ich weiß nicht deutlich, seit wann der Berg „Daisetsuzan“ heißt, jedoch hieß er früher ursprünglich „Nutaku-kamu-shupe“. Durch die Zeitschlift „Sangaku“ (das Gebirge) zweiten Jahr Ausgabe 1907 schlug jemand in Hokkaidoh vor, wie wäre es damit, ihn „Shiro-ginu-yama“ zu nennem. Es it vermuten,daraus folgt, dass der Berg vielleicht damals noch keinen Namen Daisetsuzan hatte. Wahrscheinlich ist es erst in der Taishoh Zeit(von 1912 bis ´26), dass dieser Name sich in der Welt breitete.

5-02

古い五万分の一の図幅にも、ヌタクカムウシュペを主にして、大雪山は括弧の中に入っていた。図幅名も、「ヌタクカムウシュペ」であった。ところが新版では「大雪山」に変わった。青函連絡船に大雪丸があり、急行列車が大雪号と呼ばれ、大雪国立公園が広く宣伝されるようになっては、アイヌ名は次第に影をひそめて行くばかりだろう。北海道の山名にアイヌ語が存在することは、私たち古典主義者には大変なつかしいのだが、時世の勢いは如何ともしがたい。

Auf der alten Landkarte von Maßstab 1：50.000 steht Nutaku-kamu-shupe als formeller Name und „Daisetsu“ im Klammer. Aber auf der verbesserte Ausgabe verwandelt sein Name in „Daisetsuzan“. Die Fährschiff, zwischen Aomori und Hakodate heißt jetzt „Daisetsu-maru“ und der Schnellzug auch „Daisetsu-goh“. Man werbt weiter für den Nationalpark Daisetsu, daher dürfte der Name von Ainu verschwinden. Ich als Klassischer wünsche den Namen von Ainu übrigzulassen. Aber wenn es in der Mode ist, muss ich darauf einfach verzichten.

5-03

もとはヌタプカムウシュペで、「川がめぐる上の山」の意だそうだが、プ音は呑まれて明瞭ならずク音に聞こえるので、ヌタクカムウシュペとなったという。「川がめぐる上の山」とは、原始民の直截素朴な、まことに当を得た名づけ方であって、石狩・十勝の二大川がその源をこの山塊から発し、その山麓をめぐって流れている。

Früher nannte man ihn „Nutapu-kamu-shupe“, und der bedeutet „der Berg über

dem um selbst fließenden Fluss“, jedoch wandelte sich „Nutaku-kamu-shupe“, weil man die Silbe ku statt die pu leicht hört. Dieser früher Name ist sehr bündig, naiv und geeignet zur Urbevölkerung. Die große beide Flüsse Ishikari und Tokachi fließen aus diesem Bergmassiv und um den Fuß des Berges herum.

5-04

しかし今は大雪山である。大雪国立公園は十勝や石狩の連峰も含んでいるが、私はここでは元のヌタクカムウシュペ、つまり旭岳を中心とする火山群に局限する。その火山群とは、北鎮、白雲、北海、凌雲、比布、愛別、その他の峰であって、すべて二千米を越える。北海道で二千米は貴重な存在であって、この一群は北海道のど真ん中を占め、文字通り北海道の屋根をなしているのである。

Aber er ist jetzt „der Berg Daisetsu-san“. Obwohl der Nationalpark Daisetsu den Gipfel Tokachi und Ishikari einschließt, ich beschränke hier diesen Berg auf den ehmalige Nutakukamushupe, das heißt die Vulkangruppe, wo der „Asahi-dake“ im Mitte liegt. Diese Vulkangruppe einschließt: die Berge Hokushin, Haku-un, Hokkai, Ryou-un, Hippu, Aibetsu und so andere Gipfel. Sie sind alle über zwei Tausent Meter hoch. Das Gebirge ist wertvoll und liegt in der Mitte Hokkaudo und bildet sich wörtlich ein Dach.

5-05

この山群に登るには、普通三つの口がある。層雲峡と愛山渓と湧駒別。いずれも豊富な温泉が湧いている。そのうち層雲峡が最も世に聞こえて、北海道観光旅行には欠かすことのできない訪問地になっている。貧乏な登山家には手の出ない立派な旅館が並んでいるので、俗化した温泉郷などと悪口も言われるが、しかし自然は美しい。ふと見上げると、すぐ頭上に黒岳のこごしい岩峰のそそり立ってるのも見事だし、柱状節理の岸壁が数粁も続いて、そこに幾条も大きな滝がかかっているのも素晴らしい。大箱・小箱という長いゴルジュなど、初めてこの谷に分け入った人々にはどんなに驚異だったことだろう。

Wir haben drei Eingänge für Steig auf das Gebirge: Soh-unkyoh, Aizankei und Yukomanbetsu. In jededem Ort hat der reiche Thermalquelle. Darin ist Soh-unkyoh am berühmtsten. Für Touristen nach Hokkaido ist es das Thermalbad unentbehrlich zu besuchen. Weil die Reihe von Gasthäusern ist so luxuriös, dass ein armer Bergfex sich nicht leisten zu übernachten kann, Läster maul sagt darüber „ein kitschiger Badeort“. Aber seine Natur ist sicher schön. Zufällig nach oben geblickt, sehe ich den Schroff des „Kurodake“s, der sich gleich über dem Kopf erhebt. Das ist wundwerbar. Der Felswand der pfahlförmigen Klüfte reiht sich einige Kilometer. Das ist auch herrlich, dass viele Wasserfälle daraus ausfließen. Die langen Schluchten (gorge) namens „Ohbako“ und “Kobako“ müssen die Leute,die zum ersten Mal in diesen Tal eintraten, erstaunt haben.

5-06

それらの景勝も、今は案内嬢が名調子で説明してくれるほど平易な道になってしまったが、北大両寮歌に、

瓔珞(ようらく)みがく石狩の

みなもと遠く訪い来れば
原始の森は暗くして

雪消(ゆきげ)の泉の珠(たま)と湧く

と歌われた頃に、この渓谷を探ったパイオニーアたちの、何と幸福だったことか。まだ残っていた原始の森が、伊勢湾台風の時無残にもなぎ倒されてしまったのは痛ましい。

Der Besuch der Naturschönheiten wird heute so leichter, dass die junge Führerin uns unterwegs darüber erklärt. Das ist ein Lied für Studenten der Universität Hokkaido,

die Juwel´n schleifend,
fließt schnell der Ishikari.
Wenn man den Ursprung
besucht, ist es dunkler Wald.
Das Schmelzwasser wallt,
wie sprühende Juwelen.

Wie glücklich damals waren die Bahnbrecher, die diese Schlucht besucht haben! Es ist aber sehr tragisch, dass der noch übriger Urwald vom Taifun „Isewan“ umgeworfen wurde (1959).

5-07

層雲峡から直接黒岳に登る道があるが、軽装の遊覧者は大てい銀泉台まで行く登山バスを利用し、その終点から第一花園、第二花園と呼ばれる見晴らしのいいお花畑まで登る。そこで大雪山の一端に触れて引き返す。元気のいい人たちだけが更に黒岳まで足を伸ばす。

Ein Weg führt direkt von Sohunkyo auf den „Kurodake“. Aber leichte Kleidung seiende Touristen fahren meistens nach Ginsendai mit dem Bus und hinauf von dieser Haltestelle bis zum so genannten ersten und zweiten Blumenfeld, um einen schönen Überblick zu nehmen. Dort berühren sie sich einen Teil des Daisetsu-san und kehren meistens zurück. Nur zähe Leute steigen auf den „Kurodake“.

5-08

層雲峡に比べると、他の二つの登山口はまだ素朴である。湧駒別からの登り始めの、深々した針葉樹林には誰しも目を見張る。その樹林の上にスックとそびえたつ旭岳は、この上なく美しく気高い。北海道の最高地点たるに恥じない。その林の中を歩いて、天女ヶ原という気持ちのいい湿地を通り抜けると、勾配の急な坂道になり、やがて樹林帯を抜けて姿見の池へ出る。旭岳のすぐ下にある美しい池で、正面の大爆裂火口は荒々しい岸壁となり、そこから流れ出た地獄谷には諸所に白い噴煙が上がっている。湧駒別の浴客はこのへんまで遊びに来るらしい。

Mit dem Sohunkyo vergleicht, sind andere zwei Eingänge noch natürlicher. Am Anfang des Steigs von Yukomanbetsu macht jeder große Augen am tiefen Nadelwald und der darüber hoch stehenden und am schönsten und adligsten „Asahidake“. Der ist am höchsten Berg in Hokkaidoh wert. Durch den Wald und das frische Moor namens „Ten-nyo-ga-hara“ gegangen, geht man steil bergauf, gleich danach kommt man am schönen Teich „Sugatami“ an. Der liegt gerade unten Asahidake. Der frontale Krater wird zur rauhen Felswand, und aus dem dort sich gebildeten Tal Jigoku-dani stößt hier und da die weißen Rauchenwolken aus. Die Badegäste von Yukomanbetsu sollen diese Gegend besuchen.

5-09

それから先、爆裂火口の南縁をなす稜線を頂上目ざして一途の急坂になる。おまけに足元がガラガラの噴出物の砂礫だから歩きにくい。幾度も立ちどまって息を入れながら登るにつれて、雄大な景色が開けてくる。忠別川を距てて向こうに伸び伸びと拡がった高根ヶ原、まるで山上の大グラウンドのようである。見下ろすと、樹林で覆われた広い平、その緑の間に、小さな沼が幾つも光っている。内地の山に比べて途方もなくスケールの大きいことを、ここに来て初めて登山者は感得する。

Der Grat des südlichen Kraterrands ist dorthinauf nur steil bis zum Gipfel. Dazu wegen des ausgebrochenen Gruses ist es mühsam zu gehen, Mehrmals Pause machend, kann man endlich die großartige Landschaft sehen. Das über den Fluss Chubetsu weiter breitende Hochland Takane ist wie ein großer Sportplatz auf dem Berg. Unten gesehen, ist es von den Bäumen bedeckt und viele Teiche blinken zwischen im Grünen. Die Steiger überzeugen sich erst, dass diese Landschaft, mit dem Inland vergleicht, ungeheuer groß ist.

5-10

私が旭岳の頂上に立った日は絶好の秋晴れで、大雪・十勝・石狩の連山はもちろん指呼のうちにあり、遠く、阿寒・知床や、天塩や、夕張や、増毛や、北海道の主な山をほとんど眺めることができた。

普通旭岳から間宮岳、北海岳を経て、黒岳の石室へ出るのがコースであるけれど、広大な大雪山群には道が四通八達している。旭から裾合平へ下って沼ノ平へ出るコースは、人通りが少なく、しかも変化のある景色を楽しむことができた。沼

ノ平はまだ原始的なさまの残っているひっそりした湿原で、歩いて行くと道の右に左に、いろいろの形をした沼が次々と現れる。美しい湖沼風景であった。

Am Tag im Herbst, wo ich sich auf dem Asahi-dake stellte, war es sehr heiteres Wetter. Ich betrachtete den Daisetsu, Tokachi, Ishikari natürlich im Blickfeld und die fast alle hauptsächlichen Berge in Hokkaidoh, d.h. den Akan, Shiretoko, Ten-en, Yuhbari, und Mashike konnte ich weiter übersehen. Obwohl es nomalerweise die Route, die von Asahidake übern Mamiya-dake und Hokkai-dake nach „Ishimuro“ auf „Kurodake“ gibt, und gibt es noch andere Route in diesem großen Gebirge Daisetsu in allen Richtungen. Auf der menschenleeren Route, von Asahi durch Susoai-daira bis zum Numano-daira abwärts gehend, habe ich verschiedene Landschaften genossen. Numano-daira ist ein Moor, wo die urweltliche Atomosphäre noch bleibt. Auf dem Moor gehend, sind die verschiedene förmigen Teiche rechts und links endlose zu sehen. Es war die schöne Landschaft der Seen und Teiche.

5-11

愛山渓もひなびた温泉である。そこから永山岳、比布岳を越えて、大雪の第二の高峰北鎮岳へ道が通じているが、その途中から見た愛別岳の荒々しい姿も印象的である。大体大雪の山々はみなゆったりとしたカーヴを持って、そのため女性的とか優しいとか言われるが、愛別だけが険しい岩峰で、その強いコントラストが余計に目立つのである。

Aizankei ist auch eine rustikale Therme. Dorthin über den Nagayama-dake und Hippu-dake geführt, der Weg zum zweiten höchsten Berg in Daisetsu, Hokuchin-dake. Die unterwegs rauh in Sicht kommende Gestalt des Aibetu-dakes, ist auch eindruckvoll. Weil das Gebirge Daisetsu allgemein die bequeme Gestalt haben, dann sagt man sie feminin und sanft. Doch der Aibetsu hat allein die Felsspitze, daher ist dieser starke Kontrast mehr auffallend.

5-12

北鎮を下って、雲ノ平を横切って行く長い道は、その長さを忘れる気持ちのいい高原散策であった。こういう大きな原が大雪山の中にはたくさんある。内地へ持ってきたら、それ一つだけでも自慢になりそうな高原が、あちこちに無造作に投げ出されている。この贅沢さ、この野放図さが、大雪山の魅力である。

Auf dem langen Pfad, von Hokuchin, durch Kumono-taira bergab gehend, wandelte ich im Hochland so gemütlich, wie seine Länge zu vergessen. Der Daisetsu-san hat solche vielen und großen Hochländer. Wenn nur eines Land in Honshu gebracht würde, wäre ein Stolz der Gegend. Solche Hochländer sind hier und dort leichthin geworfen. Dieser Luxus und launenhaftigkeit sind ein Reiz des Daisetsu-sans.

5-13

雲ノ平の道の果てに石室がある。昔は大雪山中にあった唯一の山小屋で、現在も番人がいるのはここだけである。元の石室に木造の小屋が建て加えられている。以前はここが大雪山の根拠地となった歴史的な石室で、その扉に Terra incognita　と書いてあったのは、その昔探検の夢を抱いた北大の学生が残して行った文字かも知れない。

Am Ende des Weges nach Kumonodaira war ein Steinzimmer namens Ishimuro. Das war früher einziger Stützpunkt im Daisetsusan. Heute ist das ein Wächter.　Aber das war die neue Hütte aus Holz umgebaut. An der Tür ist ein Graffiti „Terra incognita“ gekritzelt. Sie ist vielleicht von den ehemaligen Studenten bei Uni. Hokkaido, um die Hoffnung zur Expedition zu hinterlassen.

5-14

石室の近くにある桂月岳は大町桂月の登山を記念した名であるが、そのほかにも、間宮岳は間宮林蔵、松田岳は松田市太郎、小泉岳は小泉秀雄という風に、大雪山にゆかりのある人の名を取ったものが幾つもある。私は石室から烏帽子岳、赤岳を経て銀泉台へ下り、そこからバスで層雲峡へ出た。

Der Berg namens Keigetsu-dake in der Nähe m Steinzimmer ist genannt nach dem Aufstieg von Ohmachi Keigetsu. Sonst noch sind viele Berge, die mit den Personen etwas zu tun haben z.B. Mamiya-dake an Mamiya Rinzo, Matsuda-dake an Matsuda Ichitaroh, Koizumidake an Koizumi Hideo. Ich bin von der Hütte übern Eboshidake und Akadake zum Ginsendai abwärts gegangen und mit dem Bus nach So-unkyoh gefahren.

24. Juni 2015
26. Feb. 2016
25. 04. 2016
30. 07 2016
9.März 2019

続く

事務局註 : 深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されています。北海道から南下していきますが、百座を網羅する時間とスペースがないため日本北部に偏らないように選択しながら進めていきます。

６．デザイナー修行奮闘記　－　連載　14（井上 晃良 記）

私の「鉄道デザイナー」への道

カールスルーエからフォルツハイム

初めて立ち降りたカールスルーエ中央駅は、ドームのあるホームと大きな駅舎が特徴的なのはブレーメンと同様である。ただ、駅舎はより地味な建物で、駅前も高層ビルなどなくあっさりとしている。また、駅前に多くの路面電車が行き交っている光景はブレーメンと同じであった。しかも車両によってはモダンなデザインである。これが後に学生時代にお世話になる街であると同時に、大きく影響を受ける路面電車になるとはその時は微塵にも思わなかったのである。さて、とにかく画材の調達である。ブレーメンの中心商店街は、中央駅から歩いても 10 分と掛からないほど連続した街並みを形成している。カールスルーエも似たような感じであろうと思い込んでいたのは計算違いであった。路面電車を使わず、道を尋ねながらひたすら中心商店街に向かって歩く。20 分近く歩いてようやく目抜き通りのカイザーシュトラーセにたどり着いた。そこはブレーメン同様にトランジットモールで多くの商店が軒を連ねる。また、それ以上に驚いたのは、駅前以上に路面電車が集中していたことにすぐ気づいたことである。運が良かったのは、探していた画材店が中心商店街のまさに中心に位置していて、この通りに出た瞬間に店を見つけられたことである。それはブレーメンの画材店よりも大きく品揃えも良かったこと。紆余曲折はあったものの、たまたま忘れ物をカールスルーエの到着前に気づき、息を切らして知らない場所を探し歩いた結果、目的のものを見つけられたことを神に感謝する思いであった。

ここで忘れ物をすべて調達し、今度は路面電車に揺られて中央駅に戻る。フォルツハイムに行く予定は狂ってしまったが、まだ列車はあるので、Eilzug（日本の準急列車にあたる）に揺られて目的地に向かい、到着したのは既に日が沈んでいた時刻であった。

大学のあるフォルツハイムは、ドイツで最も大きい森と言われる黒い森地方の最北端にあたり、金などの鉱物の産地でもあることから工芸装飾品の製造業で栄えた街でもある。私が受験する美術大学も、当初は工芸装飾デザインの学校であったと聞いている。フォルツハイムの宿泊は、現地のユースホステルである。予約してくれたのはホストファミリーの計らいであった。ただ、ユースホステルは、街の郊外に位置していて、バスで行く。郊外といっても山の中にある古城を利用した建物である。

ユースホステルの発祥がドイツであることは、ご存知の方も多いであろう。私自身も日本では学生時代に鉄道の撮影旅行などで少なからず利用していたので勝手は同じである。ただ、日本のそれよりゲストの自由が多いようにも感じた。宿泊した部屋は２段ベットがいくつか置いてあり、冬の閑散期だったこともあり、私が到着した時は他に誰もいない。窓が一部開いていて、ベッドの１つが誰かに使われている形跡を見つけた。寒い冬の夜なのに窓が開いているのは空気の入れ換えなのかと思い、窓を閉め明るい窓際のベッドを使って早々に就寝した。

翌朝、寒さで目が醒めた。私のベッドの前の窓が全開にされている。きっと先客が私の就寝後に帰ってきて全開にしたのだ。窓を開けたであろう同室のゲストは高イビキで寝ている。あまりの寒さにすぐ着替えて朝食を取り、ゆっくりと支度をする間も無くバスに飛び乗り、フォルツハイム市街地の大学に向かう。冬なのでまだ外は暗い。バスで一緒になった女性が居て少し話をすると、彼女も試験のために来てユースに泊まったという。私は急いで出てきたので髭も剃っておらず、空いているバスの車中で髭を剃っていたら彼女から笑われた。程なくバスは到着し、お互い頑張ろうと約束し、別の学科を受ける彼女とも別れて試験会場に到着する。（続く）

（本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03 』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。）

７．2019 年度クリスマス会　（事務局）

12 月 15 日（日）、上越線・両毛線井野駅前の喫茶店オリーブでクリスマス会を行い、37 名の参加者で会場は超満員の盛況でした。上毛新聞社の取材もありました。

会長挨拶のあと、コンサートが始まりました。ぐんま日独協会の会員であるピアノの立川統子さんがミュンスターの大学で共に学んだヴァイオリンの田中志穂子さんと組むデュオ Marienkäfer がドイツを代表する作曲家たちの 6 曲を披露してくれました。長年演奏を共にしてきているお二人、さすがに息がピッタリ。前の晩に会員の吉田さんが調律を担当してくれたピアノも大変機嫌よく働いてくれました。

第一部が終わったところで一息。飲み物とマドレーヌを頂きながら歓談です。月例会のドイツサロン（シュタムティッシュ）にはなかなか参加できない会員の方も多く参加され、話が弾んだところで對馬副会長の手品が始まりました。2024 年に発行される新札の話に絡んだお札の手品をはじめ、手の動きには衰えは見えません。おしゃべりの方も脳梗塞を乗り越えてさらに滑らかになったようです（！）。

手品の後は、コンサートの第二部です。クリスマスにちなんだ賛美歌メドレー、そして「みんなで歌おう」のコーナーです。交換留学生の Alice がドイツ語の歌詞を披露してくれて、みなさんも素晴らしいドイツ語で熱唱してくれました。続いて Marienkäfer のお二人に打楽器奏者の瓜生郷子会員が加わってのクリスマス賛歌メドレーが演奏され、会場はクリスマスのムードが溢れました。最後に島田副会長より結びのご挨拶をいただき無事散会となりました。年を明けてからの活動の新たな原動力を蓄えられた感じです。みなさん、ありがとうございました。

８．2019 年度法人会員および新入会員紹介

★法人会員（あいうえお順、敬称略）
太田美つ子
草津町役場
少林山達磨寺
株式会社　冨運
有限会社　仲沢酒店（新入会）
伊香保温泉　福一
ホテルグリーンプラザ軽井沢

★2019 年度新入個人・家族会員（2020 年 1 月 15 日現在、あいうえお順、敬称略）
阿久澤一達
明田隆
天田義乃利
入野健一
佐藤晴彦・治子
菅原一晃
瀬下孝明（再入会）
高橋一成
田村和輝
根岸眞紀子
橋本美知子
針谷琉維己
星崎貴代子・玲奈
山田由紀子
横塚千代子
横幕和幸
吉池松枝・福田史子
脇谷恵子

★訃報
副会長の西田洽司氏が令和 1（2019）年 12 月 31 日に 87 歳で亡くなられました。同氏は 1986 年から 4 期 16 年間沼田市長として市政をけん引され、その間ドイツのフュッセン市と国際姉妹都市提携を結ばれました。ご冥福をお祈りします。